

「終戦の思い出」

若松義郎

私は父の仕事の都合で、母が妊娠^{にんしん}8か月のときに朝鮮^{ちょうせん}の新義州^{しんぎしゅう}に渡って、大正13年にそこで生まれました。新義州^{しんぎしゅう}の義^ぎをとって「義郎^{ぎろう}」と名付けられたわけです。

父は朝鮮人^{ちょうせんじん}を対象にした小学校で教師（校長）をしていて、2年ごとなど、頻繁^{ひんぱん}に異動がありました。それぞれの学校に宿舎があり、異動のたびに家族で移り住みました。場所によっては日本人学校のないところもあり、汽車で通学したこともありました。

中学校は平壤^{へいじょう}（現在のピョンヤン）にあって、寮^{りょう}に入っていました。平壤^{へいじょう}は日本軍の駐屯地^{ちゅうとんち}で、軍都として栄えていました。昭和12年、中学1年の頃は、真新しい軍服や武器を身に着けた部隊が満州^{まんしゅう}へ行くのを毎日のように見送りました。それが、しばらくするといつしか遺骨^{いこつ}を迎える日々になりました。さらに大東亜戦争^{だいてうあ}が始まると遺骨^{いこつ}を迎えることもなくなりました。その頃には遺骨^{いこつ}を拾っている余裕はなくなったということでしょう。遺骨^{いこつ}として受け取った箱に石ころしか入っていないこともあったようです。

中学を卒業してからは、^{けいじょう}京城（現在のソウル）にある鉾山専門学校に入学し、^{やきん}冶金（金属の精錬・加工）を学びました。1年生の頃は勉強することが出来ましたが、2年生になると、学徒動員で鉾山のあ^{けんじほ}る兼二浦（現在の^{しょうりん}松林）の製鉄工場へ行くことになりました。同じ^{やきんか}冶金科の学生数十人が同じ工場へ動員され、会社の宿舎に^{ねと}寝泊まりしました。宿舎は大人数が^{ざこね}雑魚寝する部屋で、作業は朝8時から夕方5時まででした。お給料は全て学校へ送られ、学費に充てられました。

私たちは理科系の学生ということで、^{がくとしゅつじん}学徒出陣は^{ゆうよ}猶予されていました。^{ちょうせん}朝鮮にいる自分にも^{しょうしゅうれいじょう}召集令状が届いたらしいですが、母が学生と申告して^{にゅうえい}入営延期となっていたようです。理系の学生は勉^{はげ}学に励めとの国の考えでした。

そうして、21歳の時、工場で作業中に終戦を迎えました。^{ちょうせん}朝鮮人の友人から、「^{ぎろう}義郎、日本負けたぞ。すぐに宿舎に帰れ」と言われました。それで初めて終戦を知ったんですね。^{ぎょくおん}玉音放送は聞きませんでした。宿舎に戻ると日本人の友人たちは皆荷造りをして勝手に実家へ^{もど}戻って行きました。私も急いで^{したく}支度をして汽車に乗りました。街中に^{ちょうせん}朝鮮の国旗が^{いっせい}一斉に^{かか}掲げられていたことに^{おどろ}驚きました。

両親と妹が新義州しんぎしゅうにいたので、新義州しんぎしゅうまで汽車で帰りました。9月に入るとソ連軍が戦闘状態せんとう しんこうで侵攻してきて、新義州しんぎしゅうで強制労働をさせられました。集落ごとに人数が割り当てられていて若かった私は毎日作業に出されました。ソ連は食糧難しょくりょうなんでしたから。シベリアへ向かう貨車に食糧しょくりょう（雑穀ざっこく、豆類など）を積み込む作業で、1人1日80俵びょうのノルマがありました。日本も国内の事で手いっぱい、外地がいちにいる何万人もの日本人には手が回らなかったのでしょうか。引揚げの手続きなどはとられませんでした。朝鮮は38度線以南はアメリカの政治家によって計画的に引揚げひきあをしていきましたけど、北のソ連の方は入ってきたのは軍人でしたから、ひどかったです。

また、日本人は朝鮮人にしばしば資産を略奪りやくだつされたり、家を追い出されたりしました。家を転々として、最後にはボロボロの小屋を修理して住んだ記憶があります。父は教師だったこともあり朝鮮ちょうせんの人との交わりが深かったため、日本人会の世話役をしていました。集落でのまとめ役や外との交渉役こうしょうやくなど色々頼られる存在でした。役所にも知り合いがいて、強制捜査そうさの予定などを夜中にこっそりやってきて教えてくれたりしました。そのおかげで前もってわかり、逃げることができました。私は軍人と勘違いかんちがいされてシベリアへ連行され

ずにすんでいました。

昭和21年の秋、それでもやはり年齢的に軍人と間違えられるとシベリアへ連行されてしまう恐れがあったため、両親より先に日本へ帰国することになりました。新義州から汽車で平壤まで行き、その先は開城（現在のケソン）まで約200キロを歩きました。そこから38度線を越え、アメリカ軍が用意した貨車で釜山へ行き、釜山からは日本政府から差し向けられた引揚げ船で博多へと上陸しました。博多からは引揚げ専用の列車で上野まで来ました。上野からの切符をもらう時に迷ってしまいました。生まれた時からずっと朝鮮で生活し、母の実家は1度訪ねたきりで、路線はうろ覚えでした。それでもなんとか母の実家にたどり着くと、叔母にシラミがいるからと、家に入るまでに身ぐるみを剥がされ、洗濯・消毒をされました。それからやっと家に入れてもらったのですが、次の日からは早速稲刈りを手伝いました。

それから、両親と妹とも無事に再会し、私たち家族は母方の祖母が、近所に用意しておいてくれた土地に住みました。農地改革による強制買収が迫っていたので、簡単なバラック小屋を建ててそこに住みました。お風呂はないので、ドラム缶風呂で、とても質素

な家でした。



仲の良かった朝鮮人の家族と一緒に撮った家族写真

本人は上段左